

## 2005年 卒業研究要旨

### 「性同一性障害」についての社会意識に関する研究

長坂佳美 (7021-1070)

指導教官：笹原 恵

#### 研究背景・目的

2001年にTBSで放映された「3年B組金八先生」など、最近、以前よりは性同一性障害に関する話をマスメディアでもよく聞くようになった。また社会的にも、性同一性障害の人の戸籍上の性別を変更する特例法が2004年に施行されるなど、性同一性障害に関して、当事者や当事者ではない人も知る機会が以前よりは増えてきているように感じる。しかし、私は当事者に実際に会って話を聞くことを通し、学校面で性教育がきちんと行われないことや、カミングアウトをする時の恐怖など、現在でも当事者にとって暮らしやすい社会になったとは言いきれないと思うようになった。「性同一性障害」と聞くと、「同性愛である」と思われたり、「暗い」などのイメージをもたれたりしてしまうなど、まだまだ社会的に問題点は多くあるようである。

私は、「ジェンダー論」という大学の授業で、初めて「性同一性障害」という言葉を聞いた。考えてみると、私は高校までの学校教育で、性同一性障害に触れた授業は受けたことがない。そして、この授業で初めて、性同一性障害、つまり体の性と心の性が一致しないということを知った段階では、はじめは、はっきりとは理解できなかった。しかし、講義を受けたり、当事者の話を直接聞いたりするようになり、他人事ではないのではないかと考えるようになった。そしてもっと詳しく性同一性障害について知りたいと思うようになった。調べていくうちに、“知らなければ、また、きちんと理解しなければ、差別や想像ばかりが先行してしまうのではないか”と考え、当事者をとりまく社会側の意識について知りたいと思ったことが、今回の論文を書くきっかけとなった。

そこで、本論では、人々の性というものは、多様であり、男性・女性という2つではあらかわすことができないということを示す。その上で性同一性障害者がどのような存在であり、現在社会的にどのような位置付けにあるのか、行政の対応はどうなっているかを示す。また、性同一性障害者が実際に抱える「性同一性障害に付随する困難」を明らかにし、非当事者の偏見などの意識は、何をきっかけとして変えることができるのか明らかにすることを研究目的とする。

具体的には、まず第1章では、性の多様性を調べていくことによって、「男」、「女」の2つだけではあらかわすことのできない、「性のグラデーション」について明らかにしていく。

第2章では、多様な性のかたちの1つである「性同一性障害」についてとりあげ、性同



害などのセクシュアルマイノリティの存在を知り、正しい知識を得ることで、人々の性問題に関する意識は変わってくるのではないだろうか。

このように、性の多様性について考える機会を与え、性同一性障害などのセクシュアルマイノリティの人々を自然に受け入れることができる基盤をつくる必要があるという結論に至った。

## 研究方法

2005年1月から2005年12月にかけて、ゼミ、研究会、講演会への参加を通し、性同一性障害当事者に接し、彼ら彼女らがかかえる社会的な問題や、まわりの社会の問題について当事者から聞き取り調査を行った。

なお、その際、情報学部笹原研究室の一員として、講演会の企画や開催にかかわったこともあり、講演会参加者から集めたアンケートの集計・分析を行った。

- ・ 2005.1.28 「それぞれの性を大切に」講演会（会津里花・・MTF）  
場所：静岡大学佐鳴会館  
主催：静岡大学情報学部笹原研究室、静岡県男女共同参画センターあざれあ
- ・ 2005年5月～2006年1月（月に1回程度）  
セクシュアリティ&ジェンダー研究会（静岡大学情報学部笹原研究室主宰）
- ・ 2005.5.20 「当時者が語る『性同一性障害』」講演会（会津里花、田熊将輝・・FTM）  
場所：静岡大学情報学部情 22 教室（情報学部専門科目ジェンダー論＜笹原担当＞の授業の一環）
- ・ 2005.7.23 「性同一性障害って何？『自分らしく生きる』」講演会（土肥いつき・・MTF）  
場所：静岡市女性会館アイセル 21 第 31 集会室 主催：GID しずおか
- ・ 2005.10.19 GID しずおか定例会
- ・ 2005年7月「現代の社会」受講生に行った「性同一性障害に関する学生意識調査」  
記述部分
- ・ 2005年7～12月「ジェンダー論」受講生（過去受講生を含む）に行った「性同一性障害に関する学生意識調査」記述部分



一性障害とは何か、どのようなものなのかを明らかにしていく。

そして第3章では、性同一性障害当事者に対する社会の対応について追い、今後の性同一性障害当事者に対する社会的対応について考えていく。

続いて第4章では、性同一性障害とメディアについて見ていき、性同一性障害がどのように取り上げられているか、正しい情報が伝えられているか、などを見ていく。

最後に第5章では、性同一性障害に関する講演会での、当事者の訴えや、参加者の感想レポート、学生を対象に行った調査を用いて、当事者から見た社会（人々）の対応はどのようなものか、また当事者の声を聞くことによって非当事者にどのような変化があったのかを考察していく。そして、教育されることにより偏見の心などはなくなっていくか、今後社会はどうしていくべきか、ということについて考えていく。

今回の調査からは、次のようなことが言える。

まず、「非当事者が理解を示すことで、当事者の苦しみは減る」ということである。実際に当事者の方の話を聞いてみると、社会側の対応による苦しみが多いように感じた。学校生活では、いじめられないように、自分の本質を隠している人が多い。また、まだ学校教育で性同一性障害について教わることがないために、本人でも自分が性同一性障害であるということを知ることができず、「自分は変人である」と思ってしまうことがある。職場では、自分の気持ちと違う性であつかわれ、仕事を課せられる。カミングアウトには、解雇の恐怖もつきまどってくる。そして、一番力になってくれる家族からも見放されるという恐れがある。これらはすべて、受け取る側の非当事者が、理解を示すことで解消される問題ではないだろうか。

この非当事者が理解を高めていくためには、「当事者の話を聞くこと」がとても有効であることが、今回の調査からわかった。当事者の話を聞く前までは、言葉を知っていても“偏見”をもっていたり、“無理解”であったりする。また、金八先生などのメディアで、当事者の苦しみを知っても、「テレビの中のできごと」「遠い存在である」という意識をもたせてしまい、“無関心”へと導いてしまうことがある。当事者の話を聞くことによって、このような非当事者の意識が変わるということがわかった。「身近に存在する」という実感がわき、「一つの個性」、「多様な性の中の一つ」として受け入れることができるようになったといえる。

しかし、当事者の話を聞いても、やはり偏見がぬぐえないという人もいる。自分とあまり関係のない人なら受け入れられるが、身近な人となると、嫌だという気持ちになってしまうという人が少なからずいることが調査からわかった。このことから、ジェンダー教育の必要性ということが言えるのではないだろうか。特に、偏見の気持ちを持つ以前の、より小さい頃からの教育が望まれる。現在の学校教育では、性は「男」「女」の2つにしか分けられないということ、子どもに植え付けてしまっている。性教育において、ジェンダーやセクシュアリティといった幅広い、多様な性について知ることにより、性同一性障